

## 34. 栗東町下戸山山田蛭子講 南古窯址について

### 経 過

昭和46・47両年度において、県教育委員会では湖南・湖東・湖北地区の遺跡分布調査を実施した。ここで紹介する山田蛭子講南古窯址は、この調査時に再発見したものであり、従来から知られていた栗東町上砥山樋ノ口瓦窯址群（ただし、現地はゴルフ場となり詳細な位置は不明）に加えて、陶瓦兼業の興味ある遺跡とその出土遺物を知ることになった。

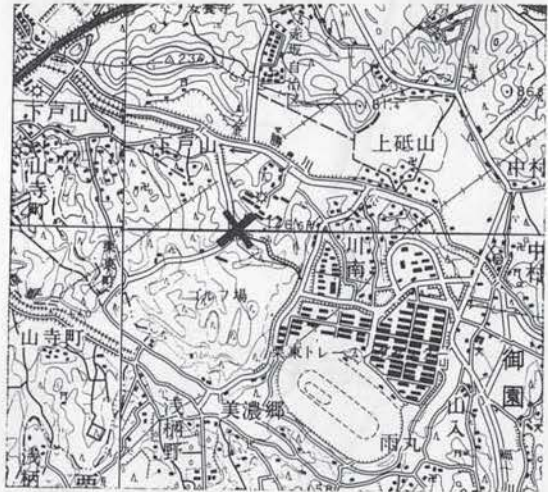
当遺跡は、『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』（昭和11年）によると「下戸山窯址 東海道線草津駅より3.5軒、栗太郡治田村下戸山字山田エビスカウにある。数年前下戸山より美濃郷に至る里道改修の中心となって破壊され、両傍に焼土のみが存し附近に祝部土器の破片が多い」とあり、瓦の伴出については触れるところがない。この山田蛭子講の谷水田入口右手・西側にも、今回数基からなる北古窯址群を発見しており、あるいは、上記「概要」記載の窯址は北古窯址群に該当するかもしれない。いずれにせよ、この下戸山・上砥山を包摂する御園には後述するように多数の古窯址群が発見されているが、わけても当遺跡は、白鳳期の瓦類と須恵器を伴出する相対年代比定の貴重な遺跡であるので、ここにその出土遺物を紹介しておきたい。

### 位 置

近江の霊峰・比叡に対峙する金勝山（湖南の名刹・良弁僧正開基と伝える金勝寺がある）の山裾に、金勝川とその支流の形成する御園盆地が開ける。下戸山・上砥山を含む御園古窯址群（今回はこう仮称しておく）は、この金勝川の支流が形成した各支谷の奥部あるいは丘陵裾部に点々と広がっている。

当遺跡は、栗太郡栗東町下戸山・山田蛭子講に所在し、御園盆地の北西寄り入口部に近い。延喜式内社・小槻神社の後方、西から4筋目の谷水田の最奥部ゴルフ場入口に相当し、スターライト栗東工場の立地する丘陵の西斜面裾部に構築されている。

さきに述べた山田蛭子講北古窯址群は、この南古窯址の北側300mを距てた谷の入口部・丘陵東側斜面に



位置図

1:50000

位置し、少なくとも4基の窯址が想定される。

また、上砥山の北東・樋ノ口に所在する樋ノ口瓦窯址は、先にも触れたように、現在琵琶湖ゴルフ場の西端付近に相当し、その詳細は不明である。しかし川勝政太郎氏の「金勝村」の踏査によると法隆寺系の軒平瓦が金勝小学校に保管されているといい、『県遺跡目録40年度』によると陶器（須恵器か）の存在が指摘されている。

さらに金勝川を溯った左岸・阿弥陀寺境内には東阪古窯址があり、支流細川との合流点付近には御園古窯址群（御園谷奥、中村高畑とともに陶瓦兼業）、辻越古窯址があって、さらにこの細川を溯った右岸には上田谷、上田谷出、上田の各古窯址が点々と分布している。これらは、いずれも困難な踏査の中で発見されたものであり、今後の踏査によってさらにその数は増加するものと思われる。

### 遺跡と遺物

当古窯址は、ゴルフ場入口道路の左手、丘陵切断箇所傾斜断面に長さ4m、幅6~7mにわたって灰原が露出している。窯体そのものはさらに奥にあるようで完存していると思われる。この灰原中に、須恵器の坏身・坏蓋・甕とともに平瓦・丸瓦が採集された。

**坏蓋(1)** 口縁径13cm・器高約3cmを有する坏蓋であり、胎土はわずかに砂粒子を含み、焼成は良好、色調





山田蛭子講南・北古窯址分布図

は外面が自然釉を帯び茶灰黒色、内面は青灰色であった。

この器形の最大のポイントは本当に坏蓋となるのかどうかにある。坏蓋と想定する理由は、外面(天蓋部)に自然釉の付着があって、蓋とみることが正しい位置(姿)であること、内外面の色調の相違は坏部が受け部と「かえり」・立上り部をもつことが予想されること、さらに坏とした場合には浅い湾曲となって不自然であることなどによった。しかし、この時期にこのような6世紀代に想定される坏蓋がみうけられることは従来の編年観にそぐわず、また、この蓋と対になる坏身が採集されていないことも注意を要する。ここでは、このような例外的なこともあり得ることとしておきたい。

**坏蓋(2)** 口縁径約13cm・器高3.7cmを有する鈕(つまみ)付坏蓋であり、胎土は少し粗い砂粒を含み、ひずみは大きく、さらに大きな気孔をもつ。色調は外面暗黄灰色、内面青灰色で全面ヨコナデ調整を施す。外面(天蓋部)はヘラ削り調整がなく、内面「かえり」・坏の内側受部は大きいが丸く収め、口縁部端部も異常に肥厚、鈕は宝珠型に定着しており、その年代を雄弁に物語っている。なお、口縁端部内面に坏身との正位置の重ね痕があり、一方の天蓋部にも他の土器の重ね痕がみうけられ、ひずみの最大の原因となったものがある。

**坏身(3)** 口縁径10.8cm・器高約3.5cmを有する坏身

であるが、その蓋にはこのような「かえり」をもつ宝珠形鈕を備えたものが妥当である。胎土はわずかに砂粒子を含み焼成は良、色調は重ね焼成のため外面白青灰色、内面青灰色と相違し、全面ヨコナデ調整を施す。器壁が薄く4mm内外を示し、口縁部がわずかに外反し、外面に凹部が形成され、内面にも対応する大きな凹部のみられることがその特徴としてとらえられる。

**坏身(4)** 口縁径約10.8cm・器高約3cmを有する坏身であり、胎土は良、焼成も良で、色調は外面黄味帯青灰色、内面は暗青灰色であり、正位置で重ねて焼成したものである。(3)と異なり厚みがあるが、やはり口縁外面に凹部が形成されその端部が若干外反し、内面中段が大きく凹部を形成する器形の特徴はよく類似している。

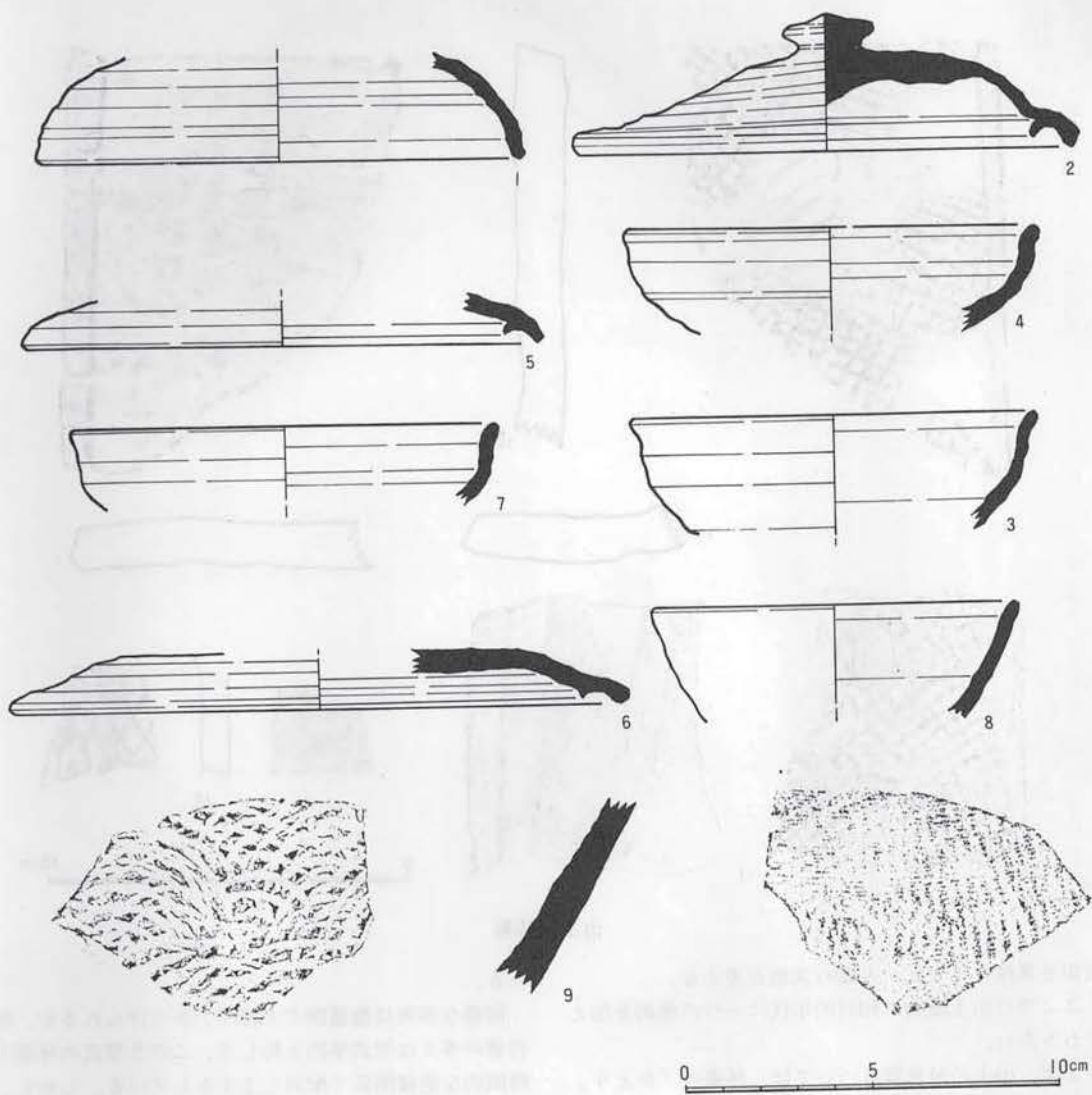
**坏蓋(5)** 口縁径約13.7cm・器高不明の坏蓋であり、胎土は良で少し砂粒を含み、焼成は良、色調は外面暗黄灰色、内面青灰色で天蓋部に高温を受けた自然釉がみうけられる。なお、色調の違いからも正位置の重ねが予想される。(2)の蓋と少し異なり、口縁内面の「かえり」がやや短く、断面三角形に近く収まり、口縁端部との曲率がゆるく、(2)の如く深く丸く収まてはいない。

**坏蓋(6)** 口縁径約16.2cm・器高不明の坏蓋であり、胎土はわずかに砂粒子を含み、焼成はひずみ大、全面にヨコナデ調整を行う。色調は外面黄青灰色、内面白青灰色を呈しているのは、正位置の重ねによる色調の相違である。口縁部内面の「かえり」部分は一段と小さく、わずかに断面三角形の突起がつくかの如き退化を示し、口縁端部は大きく丸味をもって収まり、その間は浅いくぼみとなって受け部を形成している。

これら(2)・(5)・(6)の坏蓋は、同一窯であるいは同一時期に焼成された可能性も大であるが、何回かにわたる焼成の時間差を示す可能性もないとはいえない。しかし、これぐらいの相違ある「かえり」も同一工房で製作されていた可能性のあることを示唆しているとしておきたい。

**無蓋坏(7)** 口縁径約11.2cm・器高不明の坏であり、胎土は良、焼成は堅緻で、色調は内外面とも暗青灰色で重ねの痕跡もなく、無蓋の坏身と思われる。口縁端部がわずかに外反し、少し凹部を形成する。また内面中段も大きくくぼみその特徴をよく示している。

**坏身(8)** 口縁径約9.6cm・器高不明の有蓋坏身であり、胎土はきわめて良、焼成も良好で堅緻、色調は外面黒黄色混りの青灰色、内面淡青灰色を呈し、全面ヨコナデ調整で重ね焼成を思わす内外面の色調の違いである。口縁部は外反せず、内面中段の凹部も少なく、外方へやや内湾ぎみにはほぼ真直ぐ延びている。この器形に高台が付くか否かは問題であるが、そのような破片は採集されていない。



出土須恵器実測図

甕(9) 饗腹の少破片である。内外面とも叩きがみとめられる。

平瓦(10) ひずみの大きい平瓦片であるが、凹面に布目及びヨコナデ手法、凸面に正格子の叩き手法が認められた。胎土は砂粒子を含み、色調は白味帯青灰色で叩き板の中は6.3cmを測ることが出来た。長辺は三角に2つの面取りをヘラで施し、短辺はヘラで大きく1面を取り凸面側に小さく1面、凹面側に薄く大きくもう1面を取っているが、わずかであってヘラの及んでいないところもある。

平瓦(11) 凹面に布目及びタテヘラ削り手法、凸面に正格子の叩き手法が認められ、格子目は一面約4mm四方で叩きの上にタテナデ手法による消去痕が認められる。胎土は良でわずかに砂粒を含み、焼成も良で堅緻、

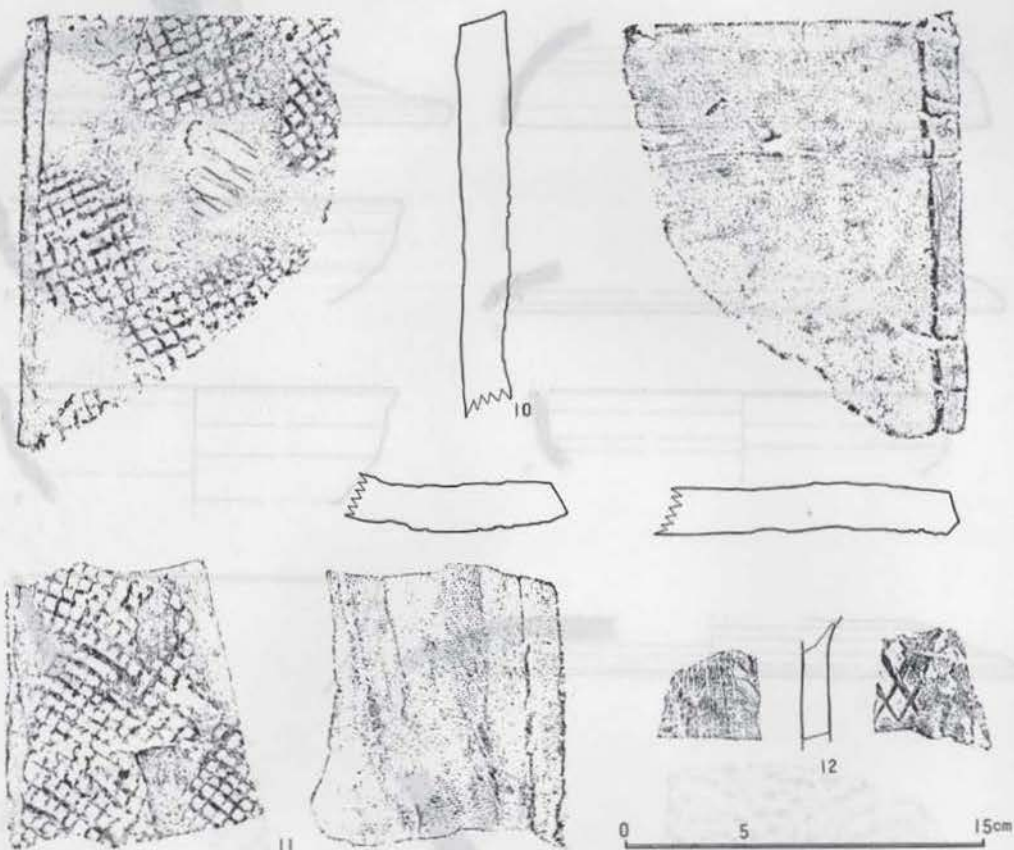
色調は淡青灰色を呈し、凹部がやや白っぽい。長辺は面取りが4回にわたって行なわれ、いずれも明瞭である。

### 小 結

この陶瓦兼業窯発見の意義は、瓦窯址あるいは寺院址、時には官衙址から出土した瓦の相対的年代と須恵器窯出土遺物から組み立てられた相対的年代(編年)とを比較検証するための好都合な遺跡であることにあろう。

もちろん、その最終的な検証のためには厳密な発掘調査による資料操作を経なければ使用に耐えるものではないが、発掘は遺跡の破壊であるとする名言に従うまでもなく、ここでは採集資料で満足し、他の例証と





出土瓦拓影

仮説を累積することが当面の課題と考える。

ここでは出土遺物の相対的年代に一つの推測を加えておきたい。

まず、出土の須恵器については、坏蓋の「かえり」がいずれにも見受けられ、それも大小とさまざまである。口縁径も十数cm前後を示し、これ以降の15cmをこえる大きなものではない。また、蓋の器高もいまだに大きく、内高で2cmは測ることが出来る。このことも、後続する坏蓋が平坦なものとなり内面器高が2cm以内に収まることと相違するところである。さらには、天蓋部の宝珠形つまみについても、いまだに宝珠形らしく立体感があって顕著な退化はうかがうことが出来ない。

これらのことから、この出土須恵器の類例を他遺跡に求めるならば、さしずめ『陶邑古窯址群I』（1966年、平安学園考古学クラブ）に報告された古窯址番号TK 217の一括資料があげうるであろう。この古窯址においては、古墳時代以来の天蓋球形の坏蓋と身にかえりのいまだにつく坏身が、上記坏蓋（蓋にかえりのつくもの）と伴出しているが、この山田経子講の陶瓦窯でも1点ではあるが古墳時代に著しい坏蓋(1)が同伴して

いる。

同様な事例は他遺跡でも諸所でみうけられるが、報告者の多くは型式学的と称して、この2型式の坏蓋を時間的な前後関係で配列しようとしている。しかし、そのように決めるためにはもう少し検討を加えた方がよさそうに思われる。

たとえば、岡山県邑久郡牛窓町の『寒風古窯址群』（1978年、岡山県教育委員会）でも、一号窯址灰原中から(a)身にかえりのつく坏身とその坏蓋、(b)蓋にかえりのつく坏蓋とその坏身、(c)蓋にかえりのすでにみられぬ坏蓋とその坏身、という具合に3型式のものが同伴しており、他方、二号窯址灰原では、一号窯址灰原の(a)がなく(b)、(c)のみで坏身坏蓋が構成されていた。この一号窯址灰原も、(a)から(c)までの変遷期間にわたって長く採集されていたものか、型式の異なるものが同時に焼成されていたものかについては灰原の中で分層的に検討し、窯体との有機的関連のもとで論じなければなるまい。さもないと、型式的にも一番新しい(c)の時期に(a)、(b)も同時に焼成されたとみなす必要がある。少なくとも(a)(b)が同時に併存した可能性は同時焼成の可能性も含めて大であるといえよう。（丸山竜平）